

正福寺遺跡・日渡遺跡

—正福寺遺跡第9次調査—

—日渡遺跡第5次調査—

久留米市文化財調査報告書 第230集



日渡遺跡第5次調査出土の内行花文鏡

2006. 3

久留米市教育委員会

序

久留米市において、21世紀の都市づくりの指針として策定された「新総合計画基本構図」の中の重要事項のひとつとなる都市計画道路網の整備に伴い計画された「東合川野伏間線」建設地内は、道路建設に先立つ発掘調査で市内でも重要な遺跡が発見されています。

この地において、今回スーパー等店舗建設に伴う発掘調査が終了し、正福寺遺跡・日渡遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

本書が遺跡の記録にとどまらず、様々な教育現場や学術研究の資料として活用されることを願うと共に、今回の調査に対してご理解・ご協力いただきました地主各位の皆様をはじめ、関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成18年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集充

例 言

1. 本書は、店舗建設工事に先立って、久留米市教育委員会が受託事業として平成17年度に発掘調査を実施した報告書である。
2. 発掘調査は久留米市教育委員会が主体となり、久留米市文化観光部文化財保護課塚本映子が担当した。
3. 本書に掲載した図面の作成、製図は、塚本、非常勤職員の畠中和子、原田志保が行った。
4. 遺構の写真は塚本が撮影した。遺物の撮影は園井正隆・塚本・山浦浩子・岡めぐみが行った。
5. 本書に掲載した遺構実測図は、国土調査法第Ⅱ座標系を基に作成し、図面の方位はすべて座標北を示す。遺構の略記号は、SK…土坑、SP…ピット、SD…溝状遺構SB…掘立柱式建物を示す。
6. 調査に関わる遺物や記録類は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
7. 本書に掲載した遺跡の略記号と調査番号は、それぞれSHJ-09・200520（正福寺遺跡第9次調査）、HWT-05・200522（日渡遺跡第5次調査）である。
8. 本書の執筆・編集は塚本が行った。

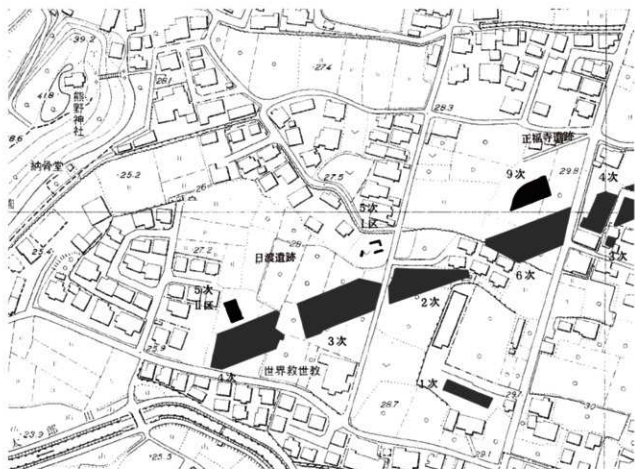
本文目次

I	はじめに	1
II	遺跡の位置と環境	3
III	調査の概要	
	1. 正福寺遺跡第9次調査	4
	2. 日渡遺跡第5次調査	7
	3. 所見	12

I はじめに

1. 調査にいたる経緯

店舗建設による開発に伴い、平成17年1月26日に地主である■■■■氏等より当該地内に埋蔵文化財の有無があるかについて、事前審査の依頼書が提出された。照会を受けた地域は、周知の埋蔵文化財包蔵地（正福寺遺跡・日渡遺跡）内にあたり、事前の確認調査を平成17年2月3日・4日に実施したところ、建設予定地内にピット・土坑・溝状遺構などが確認された。依頼主等と遺構が確認された部分について協議を行った結果、地山掘り下げ部分によって現状保存が出来ないという範囲について記録保存としての発掘調査を実施することとなった。事前審査対象地13,759㎡のうち基礎工事により削平を受ける550㎡を調査対象とし、正福寺遺跡第9次調査・日渡遺跡第5次調査を実施した。平成17年9月20日に重機を投入し、平成17年11月9日に調査を終了した。



第1図 正福寺遺跡・日渡遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

2. 調査の体制

正福寺遺跡第9次調査・日渡遺跡第5次調査における体制は次のとおりである。

調査主体：久留米市教育委員会	教 育 長	石川集充
調査総括：久留米市文化観光部	部 長	緒方眞一
	文化財保護課 課 長	関 知彦
	課長補佐	立石雅文（課主査兼務）
	事務主査	松村一良・大石 昇・近澤康治
	庶務担当	権藤節子
	調査担当	塚本映子
	出土品整理	畠中和子・原田志保（非常勤職員）

発掘調査臨時職員

秋永絹子 安達真由美 安藤國子 大淵文子 緒方静香 佐藤朱美 高松智 田代圭子

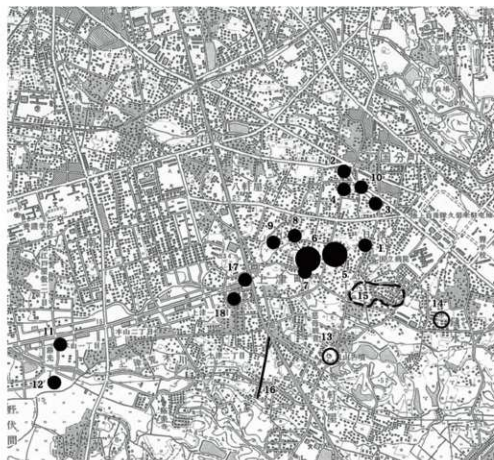
田中とし子 堤嘉博 中野ゆみ 西ヶ迫久美子 藤井佳都子 三小田美智子 村上令子

出土品整理臨時職員

加月彩

調査にあたり、地主の皆様には久留米市の埋蔵文化財発掘調査についてのご理解とご協力を頂いた。

また、鏡の分析等については、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏にご協力・ご教示頂いた。



遺 跡 名

1. 名入遺跡
2. 大木下遺跡
3. 宮ノ脇遺跡
4. 政所遺跡
5. 正福寺遺跡
6. 日渡遺跡
7. 古賀遺跡
8. 立割遺跡
9. 日隈山遺跡
10. 筑後国分寺遺跡
11. 古賀前遺跡
12. 車路遺跡
13. 浦山古墳
14. 石堰山古墳
15. 中隈山古墳群
16. 上津土塁跡
17. 上津原屋敷遺跡
18. 上津原ノ前遺跡

第2図 正福寺遺跡・日渡遺跡周辺遺跡分布地図 (1/25,000)

Ⅱ 遺跡の位置と環境

正福寺遺跡・日渡遺跡は耳納山地の西端に位置する飛岳から西へ広がる洪積台地上、標高28m地点に所在する。この台地は多数の小河川によって開析されており、周辺は谷と台地が複雑に入り組んだ地形をなし、それぞれの谷頭には飛岳の伏流水を源とした、良質な湧水点が現在でも各所にみられる地域である。この良質な湧水を利用し、昭和40年代頃までは遺跡北方一帯において川苔田が広がり、久留米の特産物として知られていたが、現在の宅地化に伴いその姿を消し、その面影は全く残っていない。

2 遺跡の所在する国分町は、地名の起こりとなった筑後国分寺が奈良時代に置かれるなど、歴史的にも重要な位置にある。以下、時代をおって概観したい。

旧石器時代は、遺跡南側の高良台・浦山丘陵上、藤光・上津・高良内町で石器が採集されているが、詳細はわかっていない。

縄文時代になると、遺跡が急増する。日渡遺跡第4次調査では、包含層から押型文土器片や姫島産黒曜石剥片などの早期の遺物が出土している。縄文中～後期の阿高式土器などが採集された名入遺跡、後期の西平式土器を採集した大木下遺跡、前期の轟A式・曾畑式と後期の北久根山式土器が出土した宮ノ脇遺跡、轟C式・曾畑式・北久根山式が表面採集されている政所遺跡などがあるほか、正福寺遺跡第7次調査では、谷部分から後期のドングリビットや編み物、木製品などが出土し、遺跡が広範囲に展開する。

弥生時代では、前期の集落跡である車地遺跡、後期の土器が採集された古賀遺跡や立割遺跡、箱式石棺が発見されたと伝えられる日隈山遺跡、後期の集落跡である古賀前遺跡が確認されたほか、筑後国分寺跡の調査では中期末の竪穴式住居が確認されている。また、日渡遺跡第2次調査では、竪穴式住居から鉄鏃や鎌・刀子などの鉄製品が12点出土した。

古墳時代には、飛岳から派生する独立丘陵に多数の古墳が造営される。5世紀には、家型石棺内部に直弧線の線刻が施された浦山古墳、家型石棺を有する石櫃山古墳などの首長墓系列の古墳をはじめ、6世紀には、中隈山古墳群などの群集墳が営まれる。しかし、多くの古墳は調査されることのないまま消滅している。集落については、野中前遺跡、荒木今宮脇遺跡や旗原遺跡などが確認されている。

飛鳥時代には、浦山丘陵西端部から本山丘陵の間、約450mにわたって築かれた上津土塁の一部が残存する。これは、高良山神籠石同様白村江の敗戦を契機として造られた。

奈良から平安時代になると、8世紀頃に筑後国分寺・尼寺が造営される。昭和27年以来断続的に行われる調査により、国分寺には講堂と塔や築地など、尼寺には掘込地業と版築積土などが確認されている。国分寺は9世紀代に大規模な改築をうけている。この他、天長年間（824～834）の創建が伝えられる天台宗鎮護山正福寺が所在する。更には、日渡遺跡では、私印と考えられる「朝」の字の印門が鋳出された銅印や越州窯系青磁碗などが出土しており、御井郡司や高良山五姓氏人として活躍した草部氏との関連が目される。

鎌倉・室町時代にはいと、国分寺・国分尼寺は13世紀中頃までに衰退していると記録されている。周辺にはこの時期の遺構は検出された例は少なく、正福寺遺跡第6次調査で13世紀の土坑が検出された程度である。

室町時代の国分町は、文献では室町時代末期～戦国期にかけて、高良山大祝領など高良神職関係の領地36町を所有していた。日渡遺跡第3次調査では、居館と考えられる区画された大溝や掘立柱式建物の確認されたほか、上津・藤光遺跡群で確認された大規模な屋敷地群や、上津原屋敷遺跡・上津原ノ町遺跡で確認された大規模な溝など、在地有力者の上津荒木氏に関連する屋敷地が一帯に展開していたと想定される。

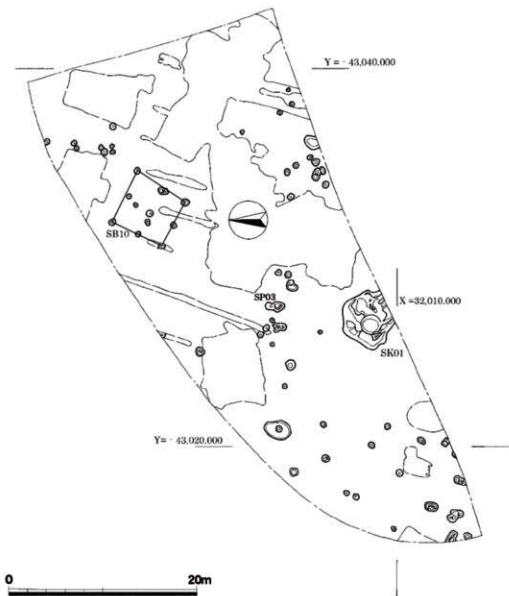
Ⅲ 調査の概要

1. 正福寺遺跡第9次調査

正福寺遺跡第9次調査は、スーパー建設用地のうち、正福寺遺跡内に入る東側部分で基礎等にて遺跡の破壊を免れない370㎡について調査を行った。平成13年度に実施された第6次調査同様、地表面から遺構面まで80～120cmと深く、表土削除に時間を要した。

(1) 遺構について

今回の調査において、掘立柱建物1棟、ピット数十基、土坑1基を確認した。遺物が殆どなく時期を決定づけるにはいたらなかった。表採遺物や表土出土遺物などから考えると中世の遺構を主とするのではなかろうか。

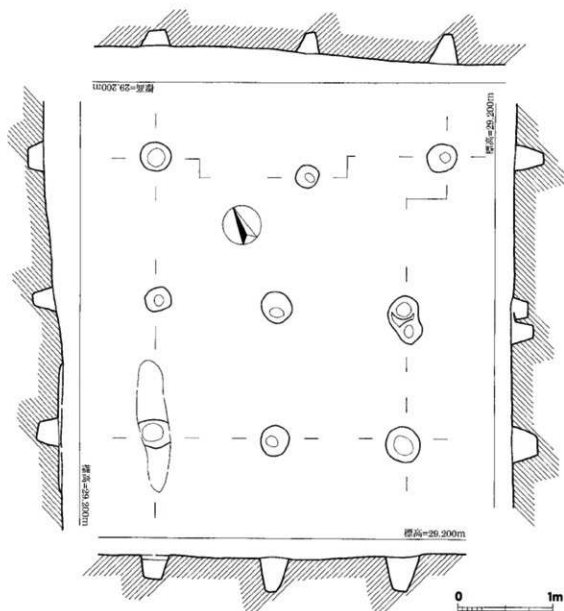


第3図 正福寺遺跡第9次調査遺構配置図 (1/400)

掘立柱建物

SB10 (第4図、図版6)

調査区の東側に検出された。2間×2間の建物で、柱と柱の間は1.5m、径約30cm、深さ約30~40cmを測る。出土遺物はなく、詳細な時期等は不明である。調査時に2間×2間の建物と考えたが、北東側部分の柱の位置が間隔が広く、なおかつ柱の掘方の深さも北東列のみ深いことから、1間×2間の建物となるかもしれない。出土遺物がなく、詳細な時期などは不明である。

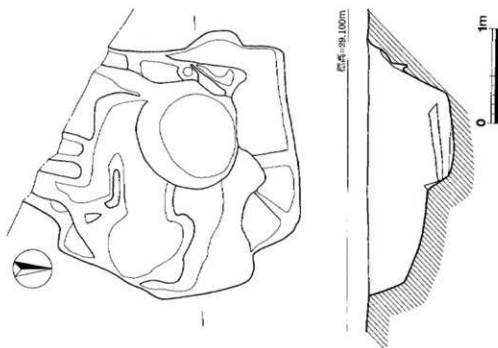


第4図 SB10実測図 (1/40)

土坑

SK01 (第5図, 図版7・8)

不定形の円形を呈する。確認長径3.0m、短径3.0m、深さ60～90cmを測る。出土遺物は少なく、床面近くから、移動式竈の縁と思われる遺物が出土したが、図化するには至らないものであった。

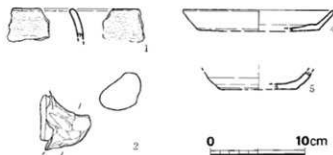


第5図 SK01 (1/40)

(2) 遺物について (第6図, 図版12・13・14・15)

今回の調査において出土した遺物の量は浅コンテナー1箱程度であった。遺物の中には、周辺部からの流れ込みと思われる黒曜石の石礫などが表採・表土から数点確認されている。隣接する正福寺遺跡第7次調査などでの大量の縄文の出土からみても、今回の調査区にも僅かにでも縄文の包含層があったのかもしれない。

1はSK01より出土の鐘崎系の縄文土器。周辺からの流れ込みによるものであろう。2は、甕の把手片。手持ちによるけずりがみられる。3は、移動式竈の縁片か。4は、土師器の皿。表面摩滅により、調整は不明。5は、土師器の坏底部片。



第6図 正福寺遺跡出土遺物実測図 (1/4)

2. 日渡遺跡第5次調査

スーパー建設敷地内の調査ではあるが、周知の遺跡名が前述の正福寺遺跡と異なるため、道路を挟んで西側部分は日渡遺跡第5次調査として引き続き実施した。日渡遺跡第5次調査のうち、東側にて対象地とした箇所をⅠ区、西側の対象地をⅡ区とした。Ⅰ区については試掘・確認調査時点で、重機による掘削が出来なかったが、平成14・15年度調査の第3次調査で、Ⅰ区に向かって走る溝を確認しており、遺構の続きが確認されるはずとの判断から、当初は申請者との協議の際調査対象地として取り扱う旨を伝えていた。しかしながら、重機を用いて表土の削除を開始したところ、2m掘り下げても地山が現れなかった。第3次調査で確認された溝は一番深いところで現地表面から1.5mほどであったことや、更に掘り進めてみても、黒色の腐食土が出土するばかりであった。また、付近北側は地形的にも丘陵の谷部が走る地点であったことなどから、Ⅰ区については谷部を掘り下げているものと判断した。その後トレンチを3本開け、Ⅰ区対象地内が全域谷部であることを確認し、土層を写真撮影してⅠ区の調査を終了した。



第7図 日渡遺跡第5次調査Ⅱ区遺構配置図 (1/400)

(1) 遺構と出土遺物について

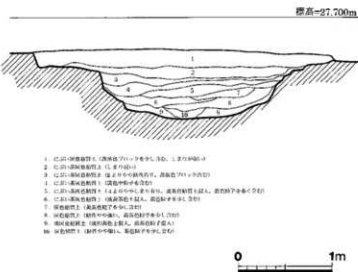
Ⅱ区の調査において、ピット数十基、溝状遺構2条を確認した。明確な遺物が殆どなく時期を決定づけるにはいたらなかったものの、ピットから出土の遺物には弥生時代のものが多い。溝状遺構については、青磁片等も含まれており、前回調査時の溝の続きであることから、中世の溝であろう。

溝状遺構

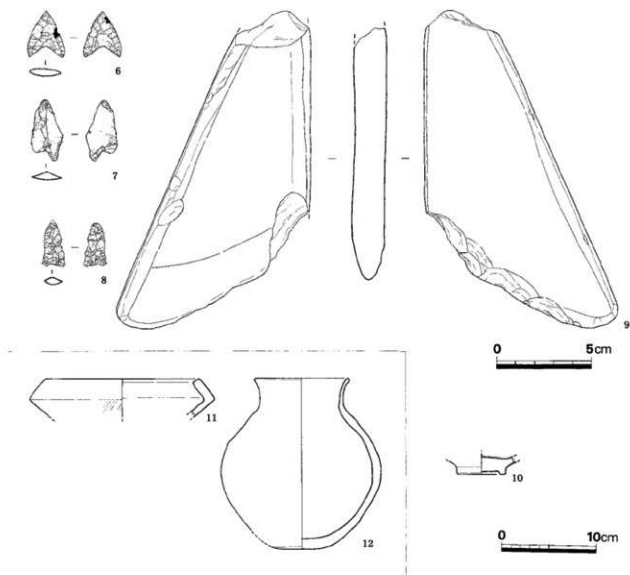
SD01

(第8図、図版9 第9図、図版10)
調査区北側に確認長5～10m、深さ70cmを測る。コンテナ1箱程の遺物が出土した。主な器種には土師器の坏、皿がある他、出土数は少ないが、須恵器の坏、青磁碗などもある。

出土遺物は、8は黒曜石の石鏃。重量1.1g。9は、片岩系の石器。全面がつるつるしており、使用痕等を確認するのが難しいが、片面中に僅かな窪みがあり、



第8図 SD01土層図 (1/40)



第9図 表土・攪乱・SD01・SP14・SP15出土遺物実測図 (1/2・1/4)

窪み石かすり石の可能性がある。10は龍泉系青磁碗の高台部片。青緑の軸を施す。

その他の遺構と出土遺物（第9図，図版16・18）

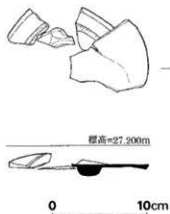
SP14およびSP15より弥生時代の壺が出土した。遺構の時代の確定できる遺物である為今回図化して報告した。11は、二重口縁の壺。口縁の器外面僅かに刷毛目調整が見受けられるものの、風化により調整は不明である。12は弥生後期の壺。全体に風化が激しく調整は不明である。

6は表土出土の黒曜石の石鏃。重量1.3g。7は近代の畑畝出土の黒曜石の剥片石鏃。重量1.4g。

遺構検出時出土の鏡（第10図、第11図）

出土状況

重機を用いて表土を剥く際、調査区西側付近は多くの土器が混入しており、重機での剥ぎ取りを一部薄めに行い、人力による地山出しを行うこととした。遺構検出を兼ねて西側部分を5cm程度掘り下げたところ、鏡の一部が出土。奇しくも、職員不在の時であったため、周辺を残して指示を待っていたという。鏡の残りを確認後、遺構の有無及び、周辺に遺構がないか更に精査を重ね検討したが、鏡に伴う遺構は確認されなかった。確認は作業終了間際であったため、翌日出土状況を撮影し、縮尺1/2による実測を行った。



第10図 鏡出土状況（1/4）

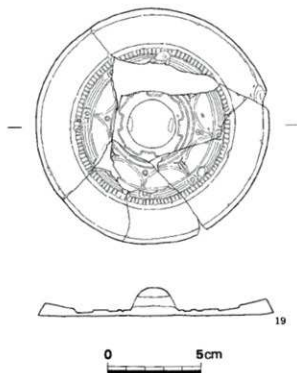
鏡

直径約12.3cmを測る舶載の内行花文鏡。岡本編年によれば、紐座は四葉文座。圓帯の断面形態からみれば四葉文座Ⅲ式。圓帯には櫛歯文。連弧文は8弧。連弧間文様は、くずれた山形文と円文の組合せ。雲雷文帯は渦文に二重以下の同心円、斜角線文は平行線で岡本編年によればⅣ式の組合せにあたる。出土時の状態は非常に良く、錆の付着が少ない。しかしながら、顕微鏡観察を行なってみると、割れ口の錆や表面のいたる所に細かな剥離が見受けられる。

福岡市埋蔵文化財調査センターのご協力のもと、実態顕微鏡観察および、蛍光X線分析装置を使って材質調査を行った結果、銅、錫、鉛の成分が顕著に表れた。また、付着の顔料からは水銀は検出されず、鉄のピークが表れたため、裏面に付着の赤色顔料はベンガラであると思われるとのデータを得た。なお、鏡面に顔料の付着は認められなかった。



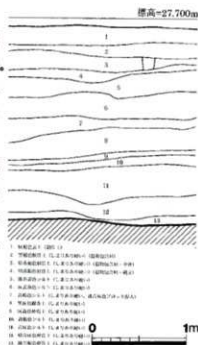
図版1 顔料付着状況（×6.3）



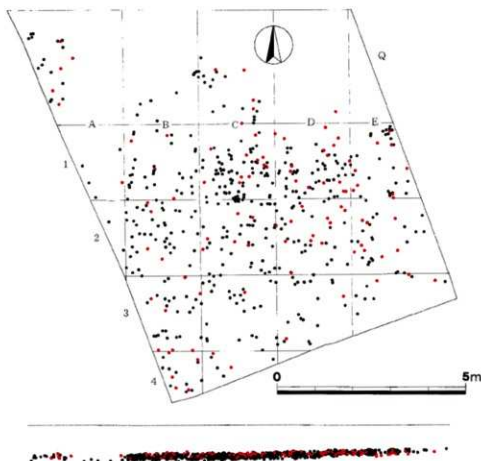
第11図 鏡実測図（1/2）

グリッド調査

グリッドは、北から南へA～E、西から東に1～4と割り付け、上層調査段階で比較的遺物の出土量が多かった南側半分の掘り下げを行った。また、当初調査範囲と定めた部分よりさらに北側にも土器の包含が認められたため、北に幅2m拡張し、Qグリッドとした。また、A-1グリッドについては、基本層序確認のため遺物包含層よりさらに掘り進め、礫層到達した段階では掘り下げを終えた。縄文時代包含層は、上層遺構検出面から下に約50cmの深さで堆積する暗褐色層（4層）で、この層の中から総数544点の遺物が出土している。遺物の時期幅は中世から縄文後期土器の段階である。総数のうち、弥生以降は309点、縄文片141点、サヌカイト50点（うち1点は石鏃）、黒曜石40点（うち1点は石鏃）、姫島産黒曜石2点、未製品の片岩系石包丁1点を数える。縄文の占める割合が隣接地の第4次調査に比べて比較的少ない。遺物はいずれも小片で接合する資料は1点も存在しない。また、出土遺物はいずれも角が丸い小片であることから、出土位置は現地点ではなく、遊離して流されてきた遺物である可能性が高い。調査区が丘陵斜面にさしかかる縁辺に位



第12図 グリッド土層図 (1/40)



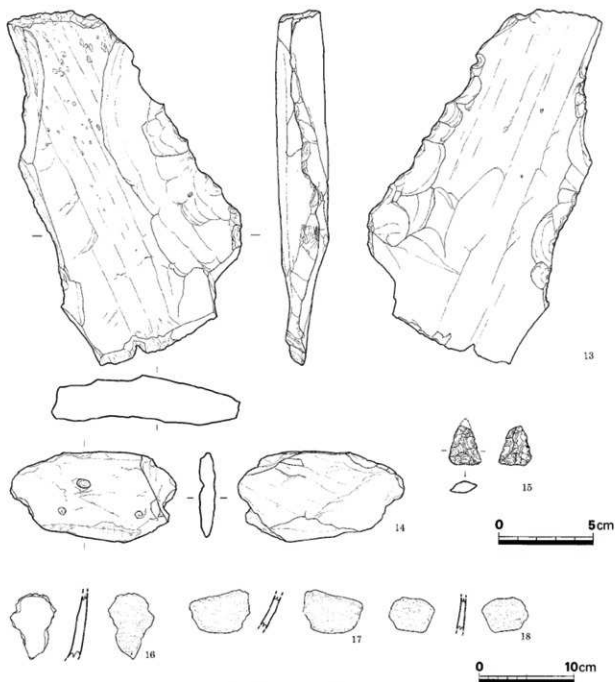
※赤いドットは石器、黒いドットは土器を表す。

第13図 グリッド配置図 (1/100)

置していることから伺えるであろう。今回の調査においても、縄文時代の遺構は検出できなかった。掘り下げを行った地点では、第8層に黒褐色の有機質腐食土の堆積を確認したが、遺物の存在は検出できなかった。第4次調査時には地割れの痕跡が確認されているが、今回の掘り下げ地点ではそれは確認されなかった。

グリッド出土遺物

13はサヌカイトのスクレイパー。剥片の再利用品か。14は片岩系の石包丁の未製品。3箇所中途まであけた穴が確認された、刃を研ぐも途中で作業中断か。15はサヌカイトの石鏃。重量は1.6gを測る。一部欠損がある。16・17・18は、縄文土器で、内外面に条痕がみられる。



第14図 グリッド出土遺物 (1/2・1/4)

3. 所見

今回の調査は、新しい発見というよりはむしろ、周辺調査の広がり確認といった感である。正福寺遺跡第9次調査では、道路を挟んで東の調査地点で大量の縄文土器等が出土しているにもかかわらず、表土と遺構検出時に僅かに縄文を含むだけであったことは、周辺の縄文時代における遺跡の広がり考える上で大きな手掛かりとなろう。日渡遺跡第5次調査では、平成14年度の第4次調査時確認された溝の続きが確認され、出土遺物に青磁碗片が出土していることから、中世以降と考えられる。地名の由来でもある国分寺など周辺施設に関わりを見出す手がかりとなろう。今回の調査において、ただひとつ特筆すべきは久留米市内より初出土となる船載の内行花文鏡の存在であろう。遺構に伴う出土ではないのが惜しまれる点である。周辺には北西部に独立丘陵が存在し、周辺の踏査時に弥生土器等採集も行われている。また、南東方向で確認された弥生時代の集落には鉄器が出土しており、その近くでは祭祀土器を伴う遺構が確認されたとの話も聞く。地主の方の話によると、鏡出土地点の田に他所から土を運び込んだことはないとのことであった。ただ、すぐ北側に向って丘陵の谷部になるため、随分以前にこの地の土を其方に運び込み造成したということであり、この造成の際、遺構を破壊してしまった可能性もある。いずれにしても、日渡遺跡周辺に大きな権力集団が存在した可能性があり、周辺調査の拡大による解明を期待したい。

正福寺遺跡・日渡遺跡出土遺物観察表

遺物 No.	出土遺構	種別	器種	法 量		色 調		調 整		胎土	備考	登録番号
				口径(長)	底径(短)	外 面	内 面	外 面	内 面			
1 第6図	正福寺 SK01	縄文	一			黒褐色～褐色	褐灰色	施文	条痕	砂粒	鎌崎系	200520 00003
2 第6図	正福寺 SK01	土器器	把手			茶褐色	茶褐色	削り		砂粒少量		200520 00002
3 図版14	正福寺 SK01	土器器	砂鉢式			にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	摩滅により不明	摩滅により不明	砂粒少量		200520 00001
4 第6図	正福寺 SP03	土器器	皿	(16.0)	(13.0)	現存 2.2	にぶい灰色～白灰	にぶい灰色～白灰	回転ナデ、回転 ヘタ切りナデ	回転ナデ後ナ デ、回転ナデ	微砂粒少量(雲母)	200520 00004
5 第6図	正福寺 SP03	土器器	杯	一	(8.4)	現存 1.9	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ、回転 ヘタ切り	回転ナデ	細砂粒	200520 00005
6 第9図	日渡 表土	石器	石鏃	2.4	2.0	0.4	灰色	灰色			サヌカイト	200522 00006
7 第9図	日渡 掘り出し	石器	掘り出し	(3.2)	(1.6)	0.45	黒色	黒色			黒曜石	200522 00007
8 第9図	日渡 SD01	石器	石鏃	2.25	(1.25)	0.4	黒色	黒色			黒曜石	200522 00003
9 第9図	日渡 SD01	石器	磨り石				青灰色	青灰色				200522 00001
10 第9図	日渡 SP14	弥生	壺	(16.3)	一	現存 4.1	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ、ヨコ ナデ後継目	ヨコナデ	砂粒、石英	200522 00005
11 第9図	日渡 SP15	弥生	壺	(10.0)	6.6	18.0	黄褐色～にぶい	黄褐色	ナデ、ナズリ後 ナデ、ナズリ	ナデ?	細砂粒	200522 00004
12 第9図	日渡 SD01	磁器	青磁碗	一	5.25	現存 1.9	灰白色	緑灰色	回転ナデ	回転ナデ	精良	200522 00002
13 第14図	日渡 グリッドD8	石器	スライド	18.75	10.0	2.4	灰色	灰色			サヌカイト	200522 00008
14 第14図	日渡 グリッドC1	石器	石包丁	(8.8)	(4.8)	(0.8)	緑灰色	緑灰色			片岩	200522 00013
15 第14図	日渡 グリッドQ	石器	石鏃	(2.05)	(1.7)		灰色	灰色			サヌカイト	200522 00010
16 第14図	日渡 グリッドD8	縄文	一				褐色	褐色、黒褐色	条痕文	条痕文?	砂鏝を含む	200522 00009
17 第14図	日渡 グリッドB2	縄文	一				褐色	褐色	条痕文	条痕文	砂鏝を含む	200522 00011
18 第14図	日渡 グリッドD2	縄文	一				褐色	褐色	条痕文	条痕文	砂鏝を含む	200522 00012
19 第11図	日渡 表土	青銅器	鏡	12.3		0.8	暗青灰色	暗青灰色			銅・錫・鉛 裏面に顔料	200522 00014



図版2 正福寺遺跡第9次調査区全景（東から）



図版3 日渡遺跡第5次調査区全景（南から）



図版4 日渡遺跡遠景（南から）



図版5 鏡出土状況（南西から）



図版6 正福寺遺跡SB10 (東から)



図版7 正福寺遺跡SK01 (北西から)



図版8 日渡遺跡Ⅰ区全景 (西から)



図版9 日渡遺跡Ⅰ区土層



図版10 日渡遺跡SD01完掘状況 (東から)



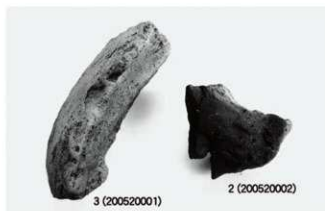
図版11 日渡遺跡SD01土層断面 (東から)



図版12 正福寺遺跡SK01出土縄文土器・表



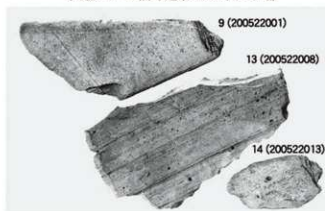
図版13 正福寺遺跡SK01出土縄文土器・裏



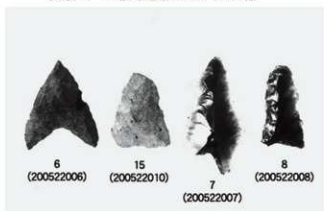
図版14 正福寺遺跡SK01出土土器



図版15 正福寺遺跡SP03出土土器



図版16 日渡遺跡出土土器



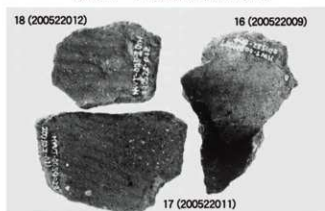
図版17 日渡遺跡出土土器



図版18 日渡遺跡SD01出土土器



図版19 日渡遺跡SP14・SP15出土土器



図版20 日渡遺跡グリッド出土縄文土器・表



図版21 日渡遺跡グリッド出土縄文土器・裏

報告書抄録

ふりがな	しょうふくじいせき・ひわたいせき —しょうふくじいせきだい19じちようさ— ひわたいせきだい5じちようさ—
書名	正福寺遺跡・日渡遺跡 —正福寺遺跡第9次調査— 日渡遺跡第5次調査—
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第230集
編著者名	塚本 映子
編集機関	久留米市役所 文化観光部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9718 Email: bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2006（平成18）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
しょうふくじいせき 正福寺遺跡 だい じちようさ 第9次調査	くろめしこくおまち 久留米市国分町 あざてわり 字立割	40203	030630	33° 17' 31"	130° 32' 09"	20050920～ 20051013	370㎡	店舗等建築による 発掘調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
正福寺遺跡	集落跡	弥生 ～ 中世	土 坑 1基 ビット 多数		弥生土器、黒曜石剥片 土師器		植木の抜き取りによる 攪乱が多く、詳細を把握出来なかったが、中世を主とする遺跡であろう。	

要 約

正福寺遺跡第9次調査では、植木の抜き取りによる攪乱が激しく、詳細を掴むことが出来なかったが、縄文土器をほとんど含まないことから、正福寺遺跡における縄文時代の遺跡の広がりを知る手がかりとなることを今後の周辺調査に期待したい。

土木工事の届出日	平成17年2月25日	遺物の発見日	平成17年10月14日
----------	------------	--------	-------------

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
ひわたいせき 日渡遺跡 だい じちようさ 第5次調査	くろめしこくおまち 久留米市国分町 あざこが 字古賀	40203	030633	33° 17' 31"	130° 32' 02"	20051011～ 20051109	180㎡	店舗等建築による 発掘調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
日渡遺跡	集落跡	縄文 ～ 中世	溝 2条 ビット 多数		弥生土器、黒曜石剥片、 青銅器、須恵器、 土師器、輸入陶磁器		第4次調査同様、縄文の 包含層が確認された。また、 土層の包含層より船 載鏡が出土したが、それに 伴う遺構は確認されな かった。	

要 約

日渡遺跡第5次調査では、第4次調査同様、縄文の包含層が確認されたが、出土遺物のほとんどが磨滅していることなどから、遺構に伴う土器ではないと判断した。第4次調査時に確認された掘立柱建物などは今回の調査では確認できなかったものの、調査区北側にて確認したSD01は出土遺物から中世の遺構と判断した。また、今回の調査では包含層からではあるが、船載鏡の内行花文鏡が出土している。調査地北西側に所在する独立丘陵にあるという弥生時代の墓域を形成する集落跡や、第4次調査で確認された鉄器を所有する弥生時代の集落跡など、周辺の弥生時代の遺跡の流れと鑑みて、なぜ、この地点から出土したのか、周辺の調査が待たれるところである。

土木工事の届出日	平成17年2月25日	遺物の発見日	平成17年11月14日
----------	------------	--------	-------------

* 北緯・東経は「世界測地系」に基づく。

(参考文献)

- 国立歴史民俗博物館 1994 「国立歴史民俗博物館研究報告第55集」
 久留米市教育委員会 1993 「日渡遺跡」 久留米市文化財調査報告書第85集
 久留米市教育委員会 2003 「日渡遺跡群 正福寺遺跡第4～6次調査」 久留米市文化財調査報告書第188集
 久留米市教育委員会 2004 「日渡遺跡群Ⅱ 日渡遺跡第2次調査」 久留米市文化財調査報告書第201集
 久留米市教育委員会 2004 「日渡遺跡群Ⅲ 日渡遺跡第3・4次調査」 久留米市文化財調査報告書第203集

正福寺遺跡・日渡遺跡

—正福寺遺跡第9次調査—

—日渡遺跡第5次調査—

久留米市文化財調査報告書 第230集

平成18年3月31日

発行 久留米市教育委員会

福岡県久留米市城南町15-3

編集 文化観光部 文化財保護課

印刷 中村印刷有限会社

久留米市梅満町972